

図書館海援隊フォーラム 2013 報告書

- 主催：図書館海援隊フォーラム 2013 実行委員会（実行委員長：永利和則 小郡市立図書館長）
共催：NPO法人キャンサーリボンズ、ビジネス支援図書館推進協議会、福岡県立図書館
後援：社団法人日本図書館協会、福岡県図書館協会、福岡県公共図書館等協議会、
公益社団法人日本プロサッカーリーグ
協賛：株式会社紀伊國屋書店、株式会社日本統計センター、日本ファイリング株式会社
株式会社富士通マーケティング、キハラ株式会社、株式会社図書館流通センター
協力：アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）、株式会社スクウッド
九州Jリーグホームタウン連携会議
日時：平成25年11月23日（土・祝） 9：30～17：00（開場・受付開始9：00～）
場所：福岡県立図書館（福岡県福岡市東区箱崎 1-41-12、電話：092-641-1123）
日程 1 開会行事午前9時30分～40分
（1） 図書館海援隊フォーラム 2013 実行委員長 永利和則 挨拶
（2） 文部科学省生涯学習政策局社会教育課 坪田知広氏の応援メッセージ代読
（3） 開催地を代表して、福岡県立図書館企画協力課長 松井恵美子氏 挨拶
（4） 特別ゲスト 社団法人日本図書館協会理事長 森 茜氏 挨拶
2 第一部 午前9時40分～正午
「全力討論！！ がん患者さんを支えるために図書館と病院・医療従事者の連携が始まる」
詳細別紙
3 共催団体代表挨拶 午後0時45分～50分
ビジネス支援図書館推進協議会会長（電気通信大学特任教授）竹内 利明氏 挨拶
4 第二部 午後0時50分～午後2時45分
「地域経済の活性化や生活支援に取り組む図書館海援隊の活動」
詳細別紙
5 第三部 午後3時～午後5時
「『Jリーグ』のクラブチームとの連携を進める図書館海援隊サッカー部の活動」
詳細別紙
6 閉会行事
図書館海援隊フォーラム 2013 実行委員長 永利和則 挨拶

参加者総数 総勢 187 名

第一部 140 名 第二部 135 名 第三部 111 名
内訳 1：一般参加者 128 名 発表者・登壇者 18 名 スタッフ 41 名
内訳 2：公共図書館 89 名 教育委員会関係者 6 名 国立国会図書館 4 名
大学・大学図書館関係者 13 名 病院・病院図書室 4 名 NPO 関係者 3 名
日本図書館協会 3 名 企業関係者 13 名、Jリーグ 1 名、文部科学省 1 名
学生 45 名 その他 5 名



開会の挨拶を行う永利和則実行委員長



文部科学省の社会教育課長 坪田知広様のメッセージを代読する三田祐子総司会



開催地代表の挨拶を行う福岡県立図書館の
松井恵美子企画協力課長



特別ゲスト：日本図書館協会 森 茜 理事長

第一部報告 「全力討論 !! がん患者さんを支えるために図書館と病院・医療従事者の連携が始まる」

- 1 演題：『始まりの話～図書館海援隊結成から、リボン部の誕生まで～』
神代 浩 氏（元文部科学省生涯学習政策局社会教育課長、現初等中等教育局国際教育課長）
岡山 慶子 氏（NPO 法人キャンサーリボンズ 副理事長、朝日エルグループ会長）
- 2 演題：『報告!!全力討論Ⅰ ～東京に終結した63人の熱い議論を報告～』
報告：渡邊 基史 氏（三島市立図書館 司書）
- 3 演題：がん情報サービス「ひとりのがんに、地域の力を！つながる人、まち、図書館」
発表者：佐藤 美加 氏（長崎市立図書館 司書）
- 4 パネルディスカッション
テーマ：『全力討論Ⅱ がん患者さんと家族を支えるために図書館と病院・医療従事者の連携が始まる』
コーディネーター
神代 浩 氏（再）、岡山 慶子氏（再）
パネリスト
小林 茂樹 氏（NPO 法人キャンサーリボンズ委員・三重大学医学部附属病院健診センター長）
塚田 薫代 氏（静岡県立こども病院 医学司書）、佐藤 美加 氏（再）
- 5 朗読部発表会「言葉のちから」
青木 裕子 氏（軽井沢町立図書館長・一般社団法人軽井沢朗読館館長、元 NHK アナウンサー）

<第一部の概要>

第一部では、がん患者さんの生活を支援する NPO 法人キャンサーリボンズと図書館海援隊参加館有志の連携活動「図書館海援隊リボン部」が、地域の図書館でがん情報を発信するためのワークショップ「全力討論！がん患者さんを支えるために 図書館と病院・医療従事者との連携が始まる」（2013年6月9日東京にて開催）の成果をベースに、がんに関する「信頼できる医療情報」発信のための連携についての活動発表と、今後より良く連携するための討議を行いました。

まず、図書館海援隊の発起人である神代浩さんから、図書館海援隊結成から「リボン部」誕生までをご紹介します。

神代浩さんの始まりの話





岡山慶子さんの開会の挨拶



渡邊基史さんの全力討論の報告

続いて、NPO 法人キャンサーリボンス副理事長 岡山慶子さんより、NPO の活動と、図書館と NPO の連携活動の実績が紹介されました。

また、東京で行われたワークショップ「全力討論！」について三島市立図書館 渡邊基史さんより発表があり、図書館で「がん」情報を発信するために、図書館と病院・医療従事者がお互い知らないことを学びながら熱くディスカッションした様子などが報告されました。

続くパネルディスカッションでは、神代さんと岡山さんをコーディネーターに、がん患者さんを支えるため、どのようにすれば、図書館と病院・医療従事者がよりよい連携ができるか、地域や市民に貢献できるかについて考えました。ディスカッションに先立って、長崎県の事例として長崎市立図書館 佐藤美加さんから、三重大学医学部附属病院 健診センター長 小林茂樹さんより三重県の事例、静岡県立こども病院 塚田薫代さんから医学図書館の連携事例、それぞれ報告がなされ、多様なネットワークの展開事例が発表されました。



長崎市立図書館佐藤美加さんの事例発表



三重大学医学部附属病院健診センター長小林茂樹さんの発表



静岡子ども病院塚田薫代さんの発表

これらの事例発表を受けて、ディスカッションでは、図書館と病院・医療従事者が‘よりよく豊かに’連携するための討議が行われ、医療情報提供のための組織での取り組みや、外部との連携、退院後のケアや後の生活のための情報の重要性などが紹介されました。

また、患者さんのための情報提供のポイントとして、「正しい情報提供のためのボトムアップ」、「クイックリファレンスから一歩踏み込んだリファレンスの実践」、「情報発信の継続」、「予防医学」が大切、等の意見がでました。最後にコーディネーターより、「図書館にこもらず外に出ていくことも大切」とまとめられました。

第一部の締めくくり、朗読部発表会『言葉のちから』では、元 NHK アナウンサーで現軽井沢図書館長の青木裕子さんによる朗読が披露され、言葉と声の力をご体験いただきました。グリーフケアに関する絵本 2 冊「泣きすぎてはいけない」「くまとやまねこ」と、キャンサーリボンズに寄せられた患者さんからのがん体験メッセージ 3 編が朗読され、表情豊かで生き生きとした青木さんの朗読に参加者全員が聞き入りました。



パネルディスカッションの様子



朗読部発表会『言葉のちから』
青木 裕子 さん

午後の開始にあたり 共催団体：ビジネス支援図書館推進協議会会長 竹内利明氏挨拶

九州の企業を見学していて、図書館大会に出ていないが中山鉄工所、クラッシャー（砕石機）製造、石を砕く機械を作っている会社を見学をしていた。40 億円～50 億の内部留保がある。そこで「図書館も 3D プリンターを置いてみては思っている。」という話を社長にすると、即答で、「それは俺が寄付する」といって、facebook で樋渡市長にメッセージを打った。子どものときから直接 3 次元でものを見る・考えることができて、そこから革命がおこる。是非、その気になった図書館は、3D プリンタを導入する

今回のイベントにビジネス支援図書館推進協議会は予算取りをして共催しているが、総会の中では、協議会の会員が何人参加しているのかということが問われる。来年も共催したいと思っているが、そのためにも、一人でも多くの方が協議会へ参加することを検討して欲しい。



午後の初めに挨拶をする BL 協議会会長竹内利明氏

第二部報告 「地域経済の活性化や生活支援に取り組む図書館海援隊の活動」

1 基調報告：『始まりの始まりの話～元気な図書館員集まれ！～』

報告者：神代 浩 氏（元文部科学省生涯学習政策局社会教育課長、現初等中等教育局国際教育課長）

2 事例報告

コーディネーター：齋藤 明彦 氏（元鳥取県立図書館長、鳥取県地域振興部理事監兼東部振興監）

報告1 『就労支援の取組み』発表者：田中のぞみ 氏（小郡市立図書館 司書）

報告2 『宇佐市民図書館のビジネス支援』

発表者：島津 芳枝 氏（宇佐市民図書館副主幹児童サービス担当）

報告3 『図書館政策フォーラム「図書館はどう使えるか～明日の生きる力と図書館」の開催について』

発表者：清水 勝三 氏（宮崎県立図書館 情報提供課情報総括担当主幹）

報告4 『「大都市・大阪で『地域創造図書館』を目指す』

発表者：戸倉 信昭 氏（大阪市立中央図書館 地域サービス担当係長）

<基調報告要約>『始まりの始まりの話～元気な図書館員集まれ！～』

報告者：神代 浩 氏（元文部科学省生涯学習政策局社会教育課長、現初等中等教育局国際教育課長）

図書館を巡る状況は、「図書館の数は増えているが指定管理者の割合が増えている」、「職員は増えているが専任の割合は減っている」、「利用は増えているが資料費は減っている」、「電子図書」だ、「クラウド」だ、「ツタヤ」だ、「スタバ」だというように様々な動きがある。

2008年12月に、日比谷公園に年越し派遣村が設置された。そこには約500人の失業者と、ボランティアは3倍以上の人が集まった。その映像をテレビで見ている自分は何か足りないと感じた。確かにそこに行けば、食べるものがあり、寝る場所もある、衣食住は満たされているが、ここにいる人が来年から仕事を探そうと思って動き出さだろうかという疑問が浮かんできた。例えば、サッカーの元日本代表のゴールキーパーの川口選手を相手に、ボールをキックするとか、俳句大会や詩のバトルとか、いろいろできることがある、まさに社会教育の出番がそこにあると感じた。

図書館界を巡る動きの中でも、2000年にビジネス支援図書館推進協議会が立ち上がったということは大きなターニングポイントだったと思う。ビジネスと図書館という全く正反対を向いているように思われるセクターが一緒にやっていくということで、大きな波紋を広げているし、これが図書館海援隊発足の原点のように感じている。2006年には『これからの図書館像』ができて、これまでのような、ただ本を貸すというだけではない、それ以上のことが図書館にはできるはずだというような具体的な内容が示された。

その後、2009年7月に社会教育課長になった時に、鳥取の「ディスカバー図書館 in とっとり」に行かないかと誘われた。実際、鳥取に行って、図書館の新しい可能性を感じた。鳥取県立図書館の入り口のチラシの棚には、「いじめ」に関する情報が館内のどこに配置してあるというようなパンフレットが準備されていた。その他に、交通事故、介護、多重債務、離婚など……。図書館界ではこれらをパスファインダーというようだが。いじめの問題なんかは典型的なものだと思う。いじめにあった子が自分で相談機関に電話するのは勇気がいる。でも図書館でこのパンフレットを手にして自分である程度情報を探して解決していく。また、解決しない場合でも、ある程度自分で調べた知識があるかないかで、専門機関への相談の仕方も違ってくると思う。図書館ってこんなことができるんだと改めて感じてた。

この年の12月、やはり雇用状況はなかなか改善せず、年越し派遣村を公設で設置された。この時、全国の知り合い

の図書館員に、「なんか図書館できることはないか？」と問い合わせたところ数時間後に、ある図が送られてきた。これは、鳥取県立図書館の高橋真太郎氏から送られてきたもので、その内容見て背筋がぞくぞくした。失業した人が失職してから再就職していくまでの様々な課題が時系列で並び、黒い文字で書かれている。その列の下には、それぞれの課題に対応する形で、赤字で図書館ができることが書かれている。彼がこの図を完成させるまでに一苦勞あったようなので、そこのところを本人に紹介してもらおうと思う。

高橋氏：「図書館目線で作っていた時には、うまく作図できなかったが、派遣切りにあった人が再就職するまでにどういう課題に対処する必要があるのかという視点で書かれた本を見たとき、この図ができた。図書館にもできることがあるということをどんどん発信していきたい。」

神代氏より2010年ごろからの展開の紹介。5月法テラスとの連携強化、10月の書週間に図書館海援隊サッカー部が発足し、その年の図書館総合展のポスターセッションに参加。2011年3月東日本大震災が発生。被災者や避難者に対して図書館ができることを作成・公表。6月Jリーグホームタウン会議にてサッカー部の活動を紹介。7月NPO法人キャンサーリボンズとの最初の打合せからリボン部の発足へ。11月図書館総合展で2010年に続きポスターセッションに参加。2012年4月参加館49館へ。図書館総合展でサッカー部・リボン部それぞれがブースを設置し、フォーラムを開催した。2013年元NHK青木アナ軽井沢町立中軽井沢図書館長に就任。朗読部の発足。体制的な課題はあるが、まだまだ多くの館に図書館海援隊に参加して欲しい。

その後、元鳥取県立図書館長の齋藤明彦氏のコーディネーターのもと、4つの事例報告が行われた。

<報告1概要> 『就労支援の取組み』発表者：田中のぞみ氏（小郡市立図書館 司書）

小郡市は、人口5万9千人余りの田園都市、交通の便が良く宅地化が進み人口が毎年増加している。昭和62年に開館し、今年で26年目を迎えている。平成18年度から3年間指定管理者による運営を行ったが、平成21年度から市の直営に戻した図書館として注目され、全国からの視察が相次いでいる。現市長のマニフェストには、役に立つ図書館づくりと読書活動の充実・支援と綴られ読書の街づくり日本一と掲げられている。小郡市の子どもの読書活動推進計画に基づき、小郡市内にある小・中・高・専門学校を支援するための学校図書館支援センターも設置されている。

平成21年に「小郡市立図書館も図書館海援隊事業に名を連ねることになった」という、永利館長からの報告で事業が始まった。「ああそうですか」という感じだったが、「じゃあ田中さんやってみてね」と言われて担当になった。ただ、何をすればいいのかというイメージはなかった。館長からは他の館のマネじゃなくて小郡が小郡らしくできる取り組みでいいからと言われ、これまでやってきたことを充実させていくという視点で、

小郡海援隊としての事業を考えた。館内はかなり狭いので、入り口近くの雑誌閲覧コーナー内に、利用者が自由に持ち帰ることができる配布物を集約した「お仕事チャレンジ&サポート情報コーナー」を設けた。このコーナーで配布しているものは基本的に小郡市役所の商工企業立地課からの提供物。配布物は多様でセクハラ・賃金に関するものなど、労働問題に関わるものもたくさんあった。職に就くことが目的の物と小郡市内の関係機関が配布するものを中心に置くこととし、配布物への問い合わせは利用者自身が各機関にってもらうように掲示した。このコーナー設置をきっかけに市の新たな機関との連携が始まった。海援隊に参加する前からやっていたことが2つあった。一つは新聞の折り込み広告の求人情報をファイリングすること。これは利用者からの問い合わせで始まった。こういうニーズもあるのかと目から鱗のおちる思いだったが、早速閲覧コーナーに置いたところ、多くの利用があった。もう一つはハロ

ーワークの求人情報のダイジェスト版を図書館にも配信してもらうように手配したことだ。今でも毎週 A3 サイズの求人情報のデータがメールで送られてくる。図書館でそれを印刷して配布している。平成 22 年 3 月、小郡海援隊に追い風になるような出来事があった。それは、「小郡地域職業相談室ふるさとハローワーク」というものが設置されたことだ。市とハローワークが共同で運営しており、市立体育館の一室にある。図書館内にも案内チラシを置いているので、『図書館でチラシをみてきたんだけど』というような方はないかと聞いてみたが、思い当りませんとの返事だった。推測だが、検索機が順番待ちになるぐらい利用が多いということなので、図書館からそちらへ行っているかも少しはあるのではと思っている。海援隊に入って 2 年間は、このコーナーと就活に使える図書資料の充実を中心にやってきた。棚の一部を「就活」・「転職」、「資格」・「労働」等の分野にそって、分類番号だけに拘らない配架も行っている。平成 24 年になって、図書館のエントランスの掲示板が使えるようになったので、関連する図書資料の紹介やポスターを掲示した。また、求人フリーペーパーも 4 誌取り寄せるように手配した。フリーペーパーの減り方は目を見張るものがあり、置いた翌日にはなくなっていることもある。関心の高さに手ごたえを感じた。今年度に入って就労に関する図書を紹介したチラシを作成し、関係機関に掲示することを始めた。特に商工企業立地課では、このチラシを印刷してパソコン教室等で配布してくれている。小郡市がごみ収集などを委託している会社の代表の方を講師に、仕事や就労に関わる講演会も開催することができた。この会社は小郡市にあり、今年 4 月に経済産業省が行っている「おもてなし経営企業」の表彰を受けている。会社の発展の経緯に加え、働くこととはどういうことか、こんな人材が欲しいというような内容を話していただいた。講演の中の顧客へのサービスの徹底や、社員教育の徹底ということに感銘を受けた。社員一人一人が責任感を強く持っていることが印象に残った。このグラフは行政サービスの満足度のアンケート結果を項目ごとに表したものだ。この会社が行っているごみ処理業務への満足度は 76%と突出して高いことがわかる。ちなみに図書館の満足度は 62%だった。この 62%という数字が高いのか低いのかよくわからないが、30 の項目の中では 5 番目だった。

今後の課題として、海援隊事業の市民への周知、就労以外のビジネス支援への取組みがある。基本的なことだが、インターネット端末でハローワークの求人情報を見ることができるなど、本以外に情報が得られるということを市民に知らせていきたいと思っている。講演会の内容を企業に向けたものにするとか、ビジネス支援への取組みにもつなげていきたい。自分たちがやってきたことが海援隊に入っているといえる内容かどうかかわからないが、発表を通して、皆さんからのアドバイスもいただきサービスを充実したいし、他の図書館がそれぞれの地域らしいサービスを始めるきっかけになればうれしい。この事業の経緯は『みんなの図書館』の 2010 年 5 月号に掲載させているので、5 ご覧いただきたい。

<報告 2 概要> 『宇佐市民図書館のビジネス支援』

発表者：島津 芳枝 氏（宇佐市民図書館副主幹児童サービス担当）

私の事務分掌は、児童サービスの担当だ。何でビジネス支援の発表を自分がやるのかという方も多いかと思うが、結局は児童もビジネスも医療も、地域のため人のためっていう目で見ればつながると思っている。

皆さんのビジネス支援のイメージは商業地に立地していて、有力な図書館があって有能な司書がいて、豊富な資料がないとできないと思っている方も多いのでは。宇佐はそんなことはない。場所は大分市と北九州市との真ん中で、地域資源は宇佐神宮と昭和の横綱双葉山の出生地。麦焼酎の出荷量は日本一で、「いいちこ」の三和酒類の本社がある。県内一の穀倉地帯で田舎だ。当館には専門の職員は、2 名しかない。市の合併後分館もできたし、移動図書館車でもでき

たのに資料費は減っている。何故これでいいといえるのか私には理解できない。自分の職場の文系男子にはもう頼らないということで考えたのが、ビジネス支援という考え方・サービスで、税金を使う図書館から税金を作る図書館という考え方への転換だった。

お金はないが、本を寄せるだけならお金はかからないと考えて、子育て支援、ビジネス支援、新しい大活字本のコーナーを作った。2008年にビジネスライブラリアン講習を受けた。2010年にレファレンスコンクールに応募して賞をもらい、2011年にはビジネスライブラリアン講習の中級を受けた。2012年には宇佐市の商工会議所の会員になった。それまでは私企業を応援するのは難しいと思っていたが、宮崎県立図書館では企業の展示を行っていた。これならできると思った。その時ビジネス支援図書館推進協議会の竹内会長もいて、農業だってビジネス支援だと言われ、それなら自分にもできると思った。正直なところ図書館が認知されるためにビジネス支援を選択しているところがある。

ただ、自分が助けられないのに、他人のビジネスを支援できるかという思いがある。自分でもやってみようと思ったけどお金がない。その時、30万円あげるから自分たちで好きなことをやっていいよという。「役所の底力」とい事業があり、これをビジネス支援の考え方でやってみようと思った。

「いいちこ」があるので麦焼酎の出荷は日本一、7つの焼酎の蔵があるものも地域資源。さらに7つの麦の栽培を行っているのも珍しいのに、稲に比べて学校では麦の勉強はしていない。これをPRする意味があると思い、このプロジェクトを考えた。図書館に来る人に紹介したら借りたいと思われると思った。食品や製品が知られていない、だから紹介してみようという実験的なプロジェクトだった。これだったら図書館に負担をかけず自分が休館日にかけずりまわればなんとかなると思った。統計データをみると九州で一番裸麦が生産されていることが分かる。県も頑張っていて麦のことをPRしようとしている。県が10万円かけて麦の穂の風景という写真を作っているのを倉庫から見つけて展示した。県内一の耕作地なので県の研究所も市内にあり、そこから見本をもらった。市内で7品種の麦からできている製品を集めて展示した。展示を見てクイズに答えたら、展示物をあげますってやった。皆さんの協力をもらい、麦焼酎を1ケースや味噌をもらうようなこともあった。図書館に行ったら得したって感じて欲しかった。

さて、この写真は何だかわかりますか？（会場から、「蛸かご」の声）正解です。麦の穂を使って蛸かごができるというのを本と合わせて展示した。結果をまとめたのがこれ。利用者は多いが普段は2階のギャラリーまで上がる人は少ない。（表をみるかたくさんの人が2階に行っているのがわかる。）また、賞品の効果か好意的な感想が多く寄せられた。地元の雑誌に醤油屋さんが紹介されたり、県の事務所が地元の麦を紹介してくれたとパン屋さんがパンを持ってきてくれたり、冬季限定のチョコを販売したお菓子屋さんが展示期間中の5月まで販売というようなことがあった。この期間に1800円のチョコのセットが200個売れそうで、またやって欲しいといわれた。地域で頑張っている人や企業の取り組みを紹介するっていうことはできる。企画展の目的の一つに普段来館されない企業の方たちも来てくれるかと期待していた。三和酒類さんは営業部長さんが来館された。この時の「麦をもっと紹介したい、学校でもあまりやってくれないし」、という話があった。その後、農政課と話をし、この冊子を作った。永井郁子さんの「わかったさんシリーズ」を使っている。その時、小学校では全生徒に配布した。冊子の後ろの方には、どんな麦が作られていて、どんな商品が作られているのかを紹介している。図書館は協力としてブックトークに出かけていった。

今やろうとしているのは、国東半島宇佐地域が世界農業遺産に登録されたこと。文部科学省の委託事業を受けて、14日には、オオサンショウウオの研究をしている安心院高校と宇佐神宮の研究をしている大学の先生と世界の農業遺産の推進協議会の会長とで講座を予定している。この時、10月にメイドインUSAというブランドができたので、その商品紹介をしようと考えている。

地域資源の掘り起こしの例では、宇佐神宮はお神輿の発祥の地といわれていることや、ジャングルバスは宇佐市内のアフリカンサファリが最初で、作った人も宇佐市内に在住であるということが分かったので、紹介しようと思っている。宇佐といえば唐揚げ専門店発祥の地ということだが、今映画を作っている。これに図書館のお金が1500万円つぎ込まれている。この映画のメイキングは郷土資料になる。地域づくりに役立つ地域資源の発掘ということはどんな図書館にでもできると思う。どんな図書館でもできる取り組みということで小さな図書館の取り組みを紹介した。

<報告3 概要> 『図書館政策フォーラム「図書館はどう使えるか〜明日の生きる力と図書館」の開催について』

発表者：清水 勝三 氏(宮崎県立図書館 情報提供課情報総括担当主幹)

昨年12月に行った図書館政策フォーラムの様子を発表して欲しいといわれた。私は選書・購入の担当をしている。その課がなんでこのようなフォーラムを担当することになったかをお話する。実際には事業を単独で行う予算も何もついていない。普及支援担当は、市町村立図書館の職員の研修を担当しているが、その検討している時に、こういう内容でやろうという話になった。ただ、図書館関係者だけで行うのはもったいないということで、一般にも開放するような形で固まっていた。本を購入する担当が何故これをやるのかということだが、当館も資料費の予算の確保が厳しい。頼りない文系男子が説明してもなかなか予算がつかない。仕方がないので、実際に図書館がどういうことをやっているのかということを知ってもらう事業を行おう。また、そのパネリストに知事に登壇していただければいいのではないかという話になった。清家さんというベテランの司書が当課にいたこともあって、調整役を担当することになった。

最初は、片山元総務大臣をお呼びして、慶應義塾大学の糸賀教授を招き、パネリストに知事や地域おこしに頑張っている方や女性に登壇していただいたらということで実際に調整に入ったが、日程調整が難しくて上手くいかず、この計画はとん挫した。その他いくつか案もあったが、図書館が地域に役立つということを実証するということで宮崎でも大きな社会問題となっている自殺・自死防止の問題を取り上げ、図書館にできることにつなげていこうということになった。基調講演とコーディネーターは慶應義塾大学の糸賀教授にお願いした。トークセッションは、自殺防止に取り組んでいるNPOの方、精神障がいのある方の自立を応援しているNPOの方、子どもの読書活動に関わる団体の事務局長さん、ホームレスと自殺防止の活動に取り組んでいる司法書士の方に知事を加えて開催した。こういうことを成功させるカギは、やはりこういうことが好きで、核になれる人がいるということだと思う。

当日は雨で、人が集まるかどうか不安だった。図書館員が多く集まれる月曜日には日程調整の関係で開催できなかった。また、やはり何故図書館が自殺防止かという問いも多く寄せられていたので本当に心配した。図書館の職員も個人的なつながりを精一杯使って広報した。結果として119名の参加があり、条件が難しいことが功を奏したように思う。当日の基調講演は糸賀先生の流れるようなお話で始まり、利用者がそれぞれに抱える課題、借金とか介護とか自殺とかそういう問題に図書館がどうアプローチできるのかをわかりやすくお話しいただいた。2部のトークセッションでは、それぞれの方の絡みがどうかと心配していたが、糸賀先生のコーディネートでうまく流れた。日ごろのパネリストの皆さんの活動は関連していないが、この場で5人が集まって話しただくと関連する部分が多くあることが良くわかった。「図書館がこういうことをすることはとても不思議に思ったけど、今日のフォーラムに参加してよくわかった」、とか「様々な立場の方が一堂に集まって話が聞けて大変勉強になった」というような声が寄せられた。また、「本の貸し借りだけでなく、図書館にはいろんな情報があるということが分かった」、「基調講演もトークセッションも大変勉強になった」というような声を多数お聞きして、本当にやって良かったと思った。この時の縁で、自

殺者の家族のサポートをしている方の会を定期的に図書館で開催することになった。図書館の敷居の低さが生きたと思った。小さなことだが、当館にとっては地道な一歩になったと思う。

課題は、図書館がいろんな機能や人脈を持っているということが、まだ県民には十分届いていないのではないかということだ。図書館側は十分にやっているつもりだが、聞いて見ると今日初めて来たという方もたくさんあった。今後もPRをずっとやっていかなければならないと思っている。また、本当に情報を必要としている人に届いたかどうかがわからない。フォーラムをやって終わりということではいけない。今後どういう活動につなげていくのかということが今の私たちの宿題。身内の教育委員会の職員に対しても理解を促す活動も大切だと思う。図書館の機能や情報が使えるということが本当に県民に分かってもらえば、図書館の予算が減らされたら困るということにつながると思うが、ここが結びついていかない。図書館の職員の資質の向上も必要だ。知事に出席してもらったイベントということで予算要求に向かったが、終わってしまった。そういう点ではうまくいかなかった。今年もまた、頑張りたい。

<報告4概要> 『「大都市・大阪で『地域創造図書館』を目指す」

発表者：戸倉 信昭 氏（大阪市立中央図書館 地域サービス担当係長）

大阪は今大変なことになっているが、今日はできてないことの報告。自分としては退路を断つというような気持ちでここにやってきている。この間、大阪市でもずっと市政改革が行われている。平成18年、前の前の市長の時に大きなマニフェストが示された。ここで図書館に求められたのはスリム化・民間活力の活用ということだった。専門職の司書が153人いたが、その内43人を減らした。現業職員はほぼ全廃、それを原資にして窓口業務の一部委託をし、祝日開館、開館時間の延長等を行った。生首を飛ばすわけにはいかないので（力ついてやめていった司書もたくさんいたが）、過員に当たる職員は他の職場へ移動させられた。自分も本庁の指導部初等教育担当というところで全国学力調査の担当をしていた。その中で実感したのは、図書館の機能が知られていない、学校の先生にも知られていないということ。この原因は、図書館職員の不徳。そこで考えた。いろんな部局に行っている図書館の仲間が図書館のことを広めるということをする。一方でいつか図書館に帰る時のために、行政の仕組みであったり、予算の話であったり、各部署で人脈等を持って帰って図書館をパワーアップさせようという触れ込みで、泣きながら出て行った。平成19年に「知識創造型図書館改革プロジェクト」を立ち上げた。いつでもどこでも誰もが課題解決に資する情報にアクセスが可能であるということ。2005年以降いろんなものに課題解決型の図書館ということを織り込んできたが、トータルとして統一した形で図書館はこういうミッションでやっていくということを全てこの中に書き込んだ。大阪市として初めて図書館全体に関わる施策の表明を行った。大阪市の人口は都心回帰で増えている。図書館サービスが充実した地域から流入してくる方たちがある中で、大阪市としてどういう図書館にしていくかということを書き込んだが、やはり総花的だ。いろんなことをやらなければならない、さらにいろんな求めに応えていかなければならない、そういうことに汲々としていたように思う。今日のポイントでもあるが、ミッションと成果を結び付けるという意味で、何をやりますということを宣言して、何ができましたということをいろいろな形で示していくことが必要だと思う。知識創造図書館ということで、「どういう課題設定」をして、「どういうアウトプット」が、「どんな形」であったのかということの評価し公表する。これは、本庁に対してアピールにもなるし、いろんなところに営業をかけるときでも、こういうところでこういう連携ができるという意味表示の資料にもなる。

さて、ビジネス支援であれば、中央図書館を大きくした平成8年には既にビジネス書のコーナーがあった。大阪商工会議所や産業振興部局との連携でチラシのコーナーを設けたり、元気塾という名前で、産業界で頑張っている方々

や起業を考えている方を対象とした講座を5～6年やってきており、非常に好評だ。医療に関しても、闘病記の展示をした後にそのリストを手直ししながらWEBで公開している。また、調べ方ガイドを30種類作っている。ただ、こうすることが全体のストーリーとして流れているのは、中央図書館が中心である。やはり大きいというスケールメリットを生かして中央図書館では何とか形になってきた。

ここからができていないことの報告になる。地域図書館が次の課題。公募の区長とか公募の校長というような言葉が新聞にも踊るが、公募で選ばれた24の行政区の区長がそれぞれの地域の特徴を出すようにと指示されている。この状況で、区長が図書館を良くしたいと言い出すことは十分に予想される。地域図書館をどうやって売っていくのかということを考えていかなければならない。府政改革のキャッチコピーの中に「ニア イズ ベター」という言葉がある。そういう問題意識の中で昨年から取り組んでいるのが「地域創造図書館」である。レジュメに小さな図書館をいかに根付かせるかと書いたが、お客様にとっても職員にとっても、地域図書館は小さいというイメージでやっている。ここは職員の意識改革が必要だ。館は小さいけど、そこから繋がっている世界は広いというようなイメージを根付かせる必要がある。スケールメリットを生かしたサービス。中央図書館には280万冊の図書がある、商用データベースも27種類ある、電子図書も始めている。こういう条件を生かせば地域図書館の大きさに囚われないサービスが展開できるはずだ。ここをどういう風に利用者に気づいてもらうかが大きな課題だと考えている。具体的な着目例として仕事支援コーナーというのがある。各館においているが光交付金でそろえた。大阪市は全体で2億円使ったがその中で設置した。電子書籍と書いているところだが、図書館は資格試験用の図書は買いにくい。資格試験の図書を入れてくれと強く言っている。一人しか使えない図書ではなくて、複数の利用者が同時に使える環境が必要だと考えている。また、ビックイシューという雑誌を発行している出版社が路上生活者脱出ガイドという本を作り、図書館に持ってこられた。実際にその本の内容を見て、生活相談に行かれた方が、「図書館で見た」と話しをされたといううれしい話も聞こえてきている。全国の状況を見ても大阪の景気の冷え込みは計り知れないものがある。行政も冷たい感じだが、何とかそこで図書館が踏ん張っていけないかと考えている。

最後に「何かあったら図書館へ」もいいが。「何もなくても図書館へ」ということも大切かと思う。たまたまた場所が図書館であっても、図書館はこういう場所だったのかという、リピーターになってもらうような工夫が必要。2つ企画を紹介。図書婚というのをやった。閉館後の図書館で本棚の前で愛を語りあるというようなことをやった。30数名の参加があった。また、書評漫オグランプりもやる。昨年は7組、今年は14組の参加がある。明日開催する。とりとめなく話してきたが、図書館にきて、図書館がこういう場所だったのかという気が付いてもらうことを、大阪ではできることをできるだけやっているということを紹介させてもらった。

<発表後のディスカッションの要約>

(コーディネーター、以下(齋藤)) 共通することは2点

- ①とりあえずやってみる。予算不足・人手不足でも踏み出せる。
- ②自分が一歩進んでいくことで周りが理解し、協力してくれる。

(齋藤) 事業実施後、図書館に対する館内外の理解は高まったか？

(島津) 事例の事業は市長へのプレゼンが前提だったので、すでに理解は得られていた。

(齋藤) 施策としておもしろいと思ってもらえれば、図書館を使ってもらえる。今日の事例は真似する価値が有る。

図書館の役割に気づいた幹部職員が輩出されたことで、予算確保や次ステージへの状況に変化はあったか？

(清水) 口蹄疫被害で予算確保にはつながらなかった。費用対効果を見せることが難しい。

(齋藤) 教育委員会は予算要求が下手。企業やNPO等と連携していくことで外から図書館が守られる状況をつくることも必要ではないか。

<感想・質疑応答>

(会場) 現実で物事を変えていくことはどんな仕事でも大切だと感じた。

(会場) 司書講習のカリキュラムは、現在の業務役になっているか？ → 役に立ったとの反応なし。

(会場) 日本図書館協会の研修は役になっているのか？

(齋藤) パネリストは挙手をしてください。 → <挙手ゼロ>

(戸倉) 資格がなくても“発想”を持っている人が図書館内で力を発揮している。司書講習で学んだことが実際に大きく影響するわけではないと思う。また、研修については、東京近辺の研修が多く、地方は参加が難しく恵まれていないと感じる。検討して欲しい。

(清水) 自分は司書ではない。司書がレファレンス対応していると、利用者の安心度が違う。

(島津) 現在児童サービス担当だが、講習では児童サービスの単位は取得していない（選択制だったため）。講習で学んだことよりも、関係ないものを結びつける力が必要で、それはブックトークで学んだ。

(齋藤) 司書講習では、図書館に対する新しいニーズにあう事柄（例えば連携の仕方など）は学べてはいない。

(会場) 今後求められる司書とは？

(齋藤) 本を好きな人は当たり前。さらに人とのつながりがうまくできる人が必要ではないか。必要なものを引き出して結びつけようとする人が必要。それをおもしろいと思う人が必要。事業実施には人間対人間で考え動ける人が大切。そのような人材を養成して欲しい。

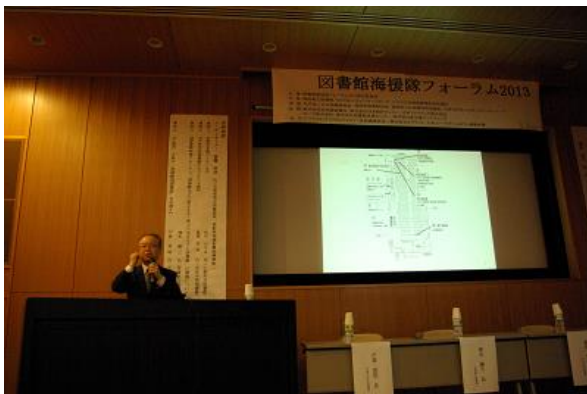
(会場) パネリストから挙手がなかったのは残念。意欲が減ったが、貸出しだけに頑張るのではなく、今後の図書館の可能性に気づいたので、その役割を発揮できるよう頑張りたい。

(会場) 私は「図書館経営論」が役に立っていると思っている。

(戸倉) 図書館経営論から経営論を学ぶのではなく、企業経営論など常に様々な事柄から学んでいくことが必要だ。私は司書に要求される資質は「ハプニングに強い」ということ。学生時代は司書になるための事柄だけを学ぼうと思っていない方がよい。

(齋藤) 図書館の可能性には2点。①図書館は何にでも対応できる。情報につなぐプロがいる。②図書館は、様々な人たちを結びつけることで、大きな効果を上げていくことができる。実際に取り組んでいる図書館はまだ少ない。広げていくためにはまず一步目を踏み込むこと。一步踏み込めば、まわりを巻き込むことができる。

<写真で綴る第二分科会>



神代浩氏の基調報告



島津芳枝氏の報告



清水勝三氏の報告



戸倉信昭氏の報告



第二部の全体風景

第三部報告 「『Jリーグ』のクラブチームとの連携を進める図書館海援隊サッカー部の活動」

- 1 基調報告 『「クラブチーム×図書館」連携の回顧と展望』
天野奈緒也氏（愛媛県立図書館主任（司書））
- 2 活動報告 『九州Jリーグホームタウン連携会議の活動報告』 佐藤 全氏（北九州市役所）
- 3 パネルディスカッション
コーディネーター
南 博 氏（北九州市立大学准教授）
パネリス
川端 暁彦 氏（フリージャーナリスト、元サッカー専門新聞エルゴラッソ編集長）
竹中 嘉久氏（愛知工業大学准教授、元川崎フロンターレ サッカー事業部長）
堀 行徳 氏（菊陽町教育委員会生涯学習課課長）
天野奈緒也氏（愛媛県立図書館主任（司書））

<第3部の概要>

祖父江「皆さまこんにちわ、それではいよいよ、最後のプログラムとなりました。どうぞ最後までお付き合いください。恐らく図書館海援隊サッカー部第一部、第二部に負けない、楽しい内容をお送りすることができると思いますので、ってハードルを上げました。ひとつお断りしておきますが、大宮アルディージャではありません。思い起こせば1年前、入れ替え戦の結果、奇蹟の残留を果たし、今日11月23日にめでたくJ1在籍10年を迎えたアルビレックス新潟のふるさと、新潟市からまいりました、新潟市立中央図書館の祖父江と申します。3部の司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは始めに、図書館海援隊サッカー部を代表しまして、愛媛県立図書館の天野奈緒也が基調報告を行います。よろしくお願いいたします」

基調報告：『クラブチームと図書館、連携の回顧と展望』 天野奈緒也氏（愛媛県立図書館）

はい、それではただ今ご紹介にあずかりました、愛媛県立図書館の天野と申します、よろしくお願いします。オレンジ色ですが、大宮アルディージャではございません。愛媛 FC です。よろしくお願いします。私の方から、基調報告としまして、『クラブチームと図書館、連携の回顧と展望』というタイトルでお話させていただきたいと思います。

まず最初に、図書館海援隊サッカー部の歩みということで…飲み会の写真ばかりであれなのですが、こんな感じで楽しくやっていますので、第1部第2部の雰囲気とは全く打って変わって、皆さんも肩の力を抜いて、ゆるく見ておいてください。図書館とサッカークラブの連携ということは、最近われわれ図書館海援隊サッカー部の取り組みで、もうわりと普通のこととなりつつあるのですが、実際このサッカー部以前の事例としましては、こんな感じで仙台だとかさいたまで、クラブチームの展示が行われたり、浦和、清水、磐田、平塚とか、それぞれサッカークラブがある図書館にサッカーの本を集めたサッカーコーナーができたという事例などもあります。特に、今回九州なので言及しておきたいのですが、2007年に当時JFLに在籍していた今はロアッソ熊本なのですが、ロッソ熊本と名乗っていた時代のクラブと熊本県立図書館さんがお話会をやっているということがありました。これは非常に早い事例として注目されます。こういった取り組みは散見されていたのですが、本格的に連携が始まり出したのは2009年から2010年にかけてのことです。大きく3つの新しい動きがあるのですが、今回は簡単に紹介したいと思います。

1つ目は、神奈川県川崎市の『川崎フロンターレと本を読もう』事業です。これは自治体がクラブチームと連携して本格的に事業化されたもっとも早い事例ではないかと思います。

2つ目が、交換展示の新たな展開。この交換展示というのは、地域の離れた図書館どうしがお互いの地域について、文化や観光情報を本やパンフレットを使って紹介しあうという取り組みで、これは2008年ごろから盛んになってきていたのですが、それは同じクラブチームがあるホームタウンどうしという切り口で行われ始めたのが、2009年から2010年ごろにかけてのことです。

次に、常設コーナーの開設ということで、茨城県の潮来市、愛媛県、さいたま市の大宮、そういったところで次々と開設されたのですが、先ほど紹介したサッカーコーナーと違うところは、サッカーの本を集めるのではなくて、クラブチームの出版物であるとか、クラブチームに関する資料を集めるという、資料のアーカイブを重視しているところです。この点についてはまた詳しく説明します。

こうした各地の取り組みが、ビジネス支援図書館推進協議会のメーリングリストで紹介されることが多くなってきて、各地でこういった図書館とクラブチームの連携の手ごたえと、地域活性化への可能性を感じたメンバーが集まって、本格的に研究しようかということで、Jリーグと図書館の連携研究会というものを結成しました。最初に行ったことは、各地の事例の調査です。その成果をもって、どうしようかというところに、図書館海援隊の隊長である神代さんとの最初の出会いがありました。その神代隊長の心強いご協力の下、文部科学省に乗り込んでプレゼンを行ったり、Jリーグの方に伺って説明を行ったりして、その結果2010年の10月、『図書館からスタジアムに行こう！スタジアムから図書館に行こう！全国キャンペーン』を実施することになりました。このキャンペーンは、最終的には地域の活性化を目指して行われたものでして、呼びかけに当たっては、ビジネスライブラリアン講習会の修了生、あるいはデジタルライブラリアン講習会の修了生のネットワークを通じて行ったもので、今回両方の講習会の立ち上げに大きく関わった方、ビジネス支援図書館推進協議会の竹内先生、紀伊國屋の岡崎さんもいらっしゃいますが、この2つの講習会がなかったら、サッカー部は無かったと言っても過言で

はないと思います。結果的に、全国 16 のクラブチームと 72 の図書館が参加して、その成果については現在も文部科学省のホームページでも紹介されています。

こういう概念図も作りました。ちょうど 2010 年というのが前回のワールドカップの開催年、それから国民読書年という 2 つのメモリアル・イヤーということは、かなり大きなきっかけとしてありました。

このキャンペーンに参加した図書館も、われわれの研究会に入ってきて、結構組織が大きくなってきて、この次どうするかということを考えた時に、研究会では名前が堅いのではないかとということを神代さんの方から頂きました。神代さんから提案があったのがこの『図書館海援隊サッカー部』です。これは神代さんのメールを一部無断で抜粋したのですが、何と先ほど午前中、神代さんは「AKB」といったのですが、当時は「モーニング娘」だったのです。肝はサッカー部や図書館海援隊に参加しない図書館でも参加できるということ。今では思い出すこともできない様々なモーニング娘のユニットがあったので、当時の私の反応は正直微妙かなというのが、本音でした。

2011 年 2 月に晴れて『図書館海援隊サッカー部』として再スタートすることになりました。ミッションとしては、先ほどのキャンペーンからずっと掲げている通り、地域の活性化が一番目指すところです。実際に取り組んでいる内容としては、連携事業の支援ということで、メーリングリストを運用して情報交換であるとか意見交換を盛んに行っています。また、新しく始めようとする図書館であるとかスポーツクラブ、あるいは行政に対して、私たちが持っているノウハウの提供も行っています。

次に、連携事業の情報発信ということで、フェイスブックページ、皆さんもしかしたら既に『いいね！』をいただいている方もいらっしゃるかもしれませんが、『図書館海援隊サッカー部』で検索していただくと、ヒットするフェイスブックページ、あとはツイッターで情報を発信していますので、ぜひ皆さんもご覧になってください。

あとは各地イベントで成果の報告をしているのですが、これまでにこんな感じでいろんなイベントに参加しています。一番大きなトピックスとしては、ちょうど 1 年くらい前ですね、横浜で行われた第 14 回図書館総合展で行われたフォーラムです。この時は錚々たるメンバーをお迎えしまして、総勢 130 名超の方のご参集をいただきました。これが去年のフォーラムの様子で、ちょうど神代さんがすごく気持ちよさそうにしゃべっているところです。この時の報告については、ビジネス支援図書館推進協議会のホームページに載っていますので、是非ご覧いただきたいと思います。スポーツジャーナリストの中西哲生さんからは「チームのアーカイブを図書館がやってくれることは非常にありがたい」という言葉をいただきましたし、J リーグの傍士理事さんの方からは「もはや J リーグと図書館は一体になったのではないか」、あるいは川崎フロンターレの天野春果部長からは「図書館と J リーグが協働して事業を行えるのは、どちらも地域の人たちが使うということで、特性が似ているからではないか」という言葉をいただきました。

現在の図書館海援隊サッカー部は、明確にどこまでがメンバーかというのは実は決まっていないのですが、ひとつの目安としてメーリングリストの登録 53 名、昨日チェックしたら 1 人増えて 54 名になりましたが、連携実績のある J リーグクラブは 36 クラブ、これは実は去年のフォーラムの時点では 33 クラブだったのですが、今日もいらっしゃる、名古屋でスタートした名古屋グランパス、それに大阪でセレッソ大阪がスタートして、後は J2 のカターレ富山も連携が始まりました。残すはと書いてありますが、これはクラブの側だけに問題があるわけではなくて、受け入れる側の図書館もなかなか反応が鈍いということもあって、まだこれだけ残ってい

ます。もしこの関係地域にお知り合いのいらっしゃる方は、声を掛けていただけるとありがたいです。今では、図書館海援隊サッカー部のメンバー以外でも連携がどんどん広がっています。例えば金沢市であるとか横須賀市などでも連携が広がっています。図書館海援隊サッカー部と名乗っているのですが、どうしてもサッカーが中心になってしまうのですが、サッカー以外の競技種目、たとえば野球とかバスケですね、バレーボール、アメフト、さらには駅伝に至るまで、さまざまな協議に連携は広がっています。

冒頭の飲み会の写真を見てもお分かりかと思うのですが、非常に楽しみながら熱く盛り上がっているのが図書館海援隊サッカー部の特徴だと思います。何で熱いのかというのを分析してみると、ゆるいライバル関係が気付かれているのではないかと思います。先ほど紹介したメーリングリストを見ると、アイディア合戦みたいな感じなんです。この図書館がこういう事例を報告したから、じゃあそこがやってないことをやってやろうということがあったり、いいものはどんどん真似て、真似るだけじゃなくって+αして、自分のところでしかできないことをやってやろうと考えている。常に出し抜いてやろうという野心が渦巻くメーリングリストだと思います。

もうひとつは、サッカークラブそのものに対するシンパシーがあるのではないかなと思います。サッカークラブというのは、単に勝ち負けを追求する、まあ負けは追求しませんけど、成績を追求するだけじゃなくって、地域の活性化というものを目指している存在です。そういった存在というのは『これからの図書館像』に描かれているような地域を支える情報拠点として、地域の活性化を目指そうという図書館と全く同じ方向性なので、だからこそシンパシーを感じるところではないかと思います。

以上が、これまでの振り返りなのですが、ここからはこの後のパネルディスカッションにつなげる論点整理ということで、大きく3つの論点のお示ししたいと思います。そのうちの2つがこれまで図書館海援隊サッカー部が取り組んできた成果についてです。

1つ目が『クラブの歴史をアーカイブする』ということ。クラブの歴史を地域の図書館にアーカイブすることの意義について論じたいと思います。具体的にはクラブの常設コーナーの設置。これは先ほど説明したのですが、クラブが刊行した出版物、例えばイヤブックスのように出版ベースに乗っているものもあれば、試合ごとに試合の見どころとかイベント情報が載っているマッチデー・プログラム。そういったものも棄てずにファイリングして図書館の資料として残していくということもやっています。さらには、クラブについてとかクラブに所属する選手について書かれた雑誌記事であるとか、そういったものなども網羅的に収集しています。特に九州などでは福岡市さん、長崎市さんなどで行われています。また、こういう常設コーナーを設けなくとも、歴史を伝える企画展示ということでは、サガン鳥栖がJ1昇格した時の展示なんかも佐賀県内のいくつかの図書館で行われました。特に今回は福岡で会場を貸していただいていますので、アビスパ福岡との連携の取り組みを特に取り上げて紹介したいと思います。これが福岡市総合図書館の常設コーナー『がんばれアビスパコーナー』です。ここにアビスパの資料を置いたり、あとは掲示板を作って細かい情報なんかを載せたりしています。ここではメッセージを送ったりしています。これが企画展示の方で、今年の2月から4月にかけて行われた『アビスパの歴代ユニフォーム展』です。これはユニフォームであるとかグッズを展示しているのですが、この時何と大塚社長自ら持ってこられたということで、かなり大塚社長さんの地域貢献活動であるとか図書館での展示に対する意気込みが窺えるエピソードだなと思いました。

このような取組にどういった意味があるかということを考えたところ、1 つめとしては、スタジアムやグッズショップでそのクラブの出版物をアーカイブしたり歴史を紹介したりできるところというのは、実はそんなに多くないです。例えば、鹿島アントラーズは自分のところのスタジアムに鹿島アントラーズミュージアムというのを作っているのですが、そういったところはなかなかないですね。あとは大宮アルディージャさんであるとか、この近くだったら大分トリニータなんかもグッズショップの一角にトロフィーを展示したりとか、クラブの歴史を紹介するようなコーナーを設けたりしているのですが、わが愛媛 FC を始め、そこまで手を出せるところというのは非常に少ない。クラブがその歴史をどのように残して伝えていくかという課題に、図書館が解決する支援ができるということです。

2 つめが、そういったそのクラブの資料を図書館が受け入れることの意義ということで、クラブ自身が出版する出版物だけでなく、クラブについて書かれた周辺の資料であるとか、それを取り巻くサポーターグループが出している刊行物なんかですが、そういったものを集めることでさらにそれを地域資料として受け入れることで、他の図書館資料と併せて、そのクラブの存在というのを多角的にとらえることができると思います。これはもう少し具体的に言うと、例えばこの他の図書館資料というのは、新聞記事であるとか、その自治体の議会議事録などがそうだと思うのですが、行政がそのクラブに対してお金を出しているケースがあります。あるいは、スタジアムを建てる時の議論なども、そういった議会議事録には当然出てくると思うのですが、(あとは行政の広報誌にも当然登場することがあると思いますが、) そういったものとクラブが刊行するものと併せて見ることで、その地域の中でのクラブの姿というのを浮き彫りにすることができるのではないかと、ということが考えられます。まず 1 点目、こうしたクラブの歴史を地域の図書館でアーカイブすることの意義について議論をしたいと思います。

2 点目ですが、こちらは図書館海援隊サッカー部が結成当初から掲げているミッションである地域活性化への貢献ということです。これは、最初のキャンペーンの時から出てきていることなのですが、図書館の利用者に対して連携するサッカークラブの PR を行う、逆にクラブのサポーターの皆さん、お客さんに対して図書館の PR をするということで、選手のオススの本の紹介であるとか、選手の読み聞かせを図書館で行う、あるいはスタジアムに図書館が出張しておはなし会を行ったり、本の貸し出しを行ったりということをしています。サッカー部の取り組みの中で一番びっくりしたのが、長崎県立図書館さんが V ファーレン長崎の新体制発表会の会場に図書館がなっているんですね。これは V ファーレン長崎のファンの方も注目するし、図書館のお客さんも V ファーレン長崎が図書館にやってくるというインパクトがある。明日、どうなるか分かりませんが、この後プレーオフを制して J1 に昇格した暁には、図書館で祝勝会が行われるのではないかなと思ったりもするのですが、タイムキーパーが面白くない顔をしているのであまり言いませんが・・・。(※フォーラムの翌日 24 日は J2 プレーオフ第 1 戦。長崎は京都と対戦した。一方、タイムキーパー役は同じくプレーオフ参戦した千葉のサポーター図書館員)

もう 1 つは、地域情報の発信ということで、先ほど紹介した交換展示ですね。これが一番そうだと思うのですが、昨年図書館総合展のフォーラムですごいプレゼンを行った図書館海援隊サッカー部が誇るフォワードの宇佐市民図書館は、スタジアムで物産品の抽選会なんかを行って、すごい盛り上がりを見せたということもあります。画面下の人形を使った観光地紹介というのは、これはよく分からないと思うので実物を見せたいと思いますこう

いう愛媛 FC 公式キャラクターじゃなくて熱烈サポーターという位置付けの一平君という、サッカーのサポーターにはカルトな人気を誇るキャラクターがいるのですが、これを使って草津の湯畑の前で撮った写真であるとか、塩尻さんの奈良井宿のところで撮った写真であるとか、塩尻産のワインを持って涙を流している一平君とか、上山城を見上げる一平君というので、すごくインパクトのある写真なのですが、この湯畑で撮った写真は『J's GOAL』というサッカーファンサイトのアクセスの上位 3 位くらいに食い込んだというすごい写真です。これはなかなか図書館発の情報発信としては、すごい効果があったのではないかと思います。こうした地域活性化の取り組みの成果として、お互いが図書館に取ってもクラブに取っても連携パートナーとして欠かせない存在になってきているのではないかと、その一例として埼玉の図書館では大宮の図書館が大宮アルディージャとの連携の中心だったのですが、今年からはそれ以外の地域館も連携を行うように広がっているということを聞いています。もうひとつは、地域の中での図書館へのニーズが高まるということで、新潟市ではスタジアムに出張することをきっかけに、そのほかの新潟市の主催イベントであるとか、街づくりのイベントに図書館に声が掛かるようにもなったそうです。3 つめが、連携によってなかなか他に出てこないような媒体、例えば交換展示で行った先の地元メディアであるとか、サッカーメディアに図書館の名前が登場する、逆に図書館の関係の雑誌にサッカークラブの名前が出るというようなことも行っています。また、相乗効果でフェイスブックやツイッターなどでよく話題にもされております。

論点の 3 つ目としましては、今後の展望ということで、サポーターの課題解決をいかに支援するかということを考えたいと思います。サッカーのファン・サポーターって、皆さんどういうイメージを持っていますか？私は、最初全く知らない時には、何か裸で踊って歌って飛び跳ねてる連中、しかも時々発煙筒を投げたりとかする危ない人たちかなと思っていたのですが、そういうサポーターの人たちのミーティングにもちょっと顔を出したりするようになって、こんな感じでいろんな活動を行っています。こういった活動というのは、クラブから言われるのではなくて、自分たちで考えて自主的に行動する人たちなんです。しかも、クラブを愛してさらに地域を愛する人たちということが言えます。こういう人たちの力が最も発揮されたのが、先の東日本大震災の復興支援活動です。この時には、「サッカーファミリー」であるとか、「サッカーのチカラ」というのを合言葉にして、日本中だけでなく世界中に支援の輪がどんどん広がって行きました。具体的にスタジアムで被災地の物産を販売したり、募金活動を行ったり、あるいはアウェイ観戦のついでに被災地に赴いてボランティア活動を行うというような活動を、現在も行っています。本当に、こういう人たちが地域にいるんだってということを、連携を始めるまで知らなかったのが、こういう素晴らしい人たちに何かできないだろうかということを考えた時に、実はもう既に取り組んでいる図書館があるんです。山形の上山市立図書館なのですが、ここではもう企画そのものが課題解決支援企画と名乗ってしまっていて、初めてスタジアムに行く人のために、クラブやスタジアム、それから応援の仕方を学ぶ講座を作ったり、あるいはサッカースタジアムについて学ぶシンポジウムを行ったり、いろんな活動をしています。特に面白かったのは、こういった講座をきっかけにそれまでなかったサポーターグループが組織されるようになって、これは図書館が住民同士の繋がりを創出するようになったという、非常に面白い取り組みだなと思いました。

では、今後図書館がサポーターの皆さんに対してどういうことができるのかということ考えた時に、例えばサポーターの取り組みを図書館で紹介することで、これまで知らなかった人たちへ紹介して、また参加する人を

増やしていくということができるでしょうし、またそういったサポーターの人たちが抱えている課題に対して、例えば集客のアイデア何かないかという時に、他の地域で成功を収めた事例の新聞記事を提供するであるとか、あるいは何かイベントを考える時に地域の歴史に絡んだ情報、郷土資料とかそういったものを提供するということが考えられます。この辺については、また何ができるかということ、パネルディスカッションでお話できればと思います。サッカークラブの存在というのは、社会関係資本、ちょっと難しい言葉なのですが、簡単にいうと社会や地域における人々の信頼関係や結び付きといったところなのですが、そういったものを創り出す存在なので、そういったものに図書館が存在する意義があるのではないかなと。これは去年の図書館総合展のフォーラムでも話したことではあるのですが、クラブに関わる人、またクラブを支える人をどんどん増やしていくことがクラブの評価につながって、さらには最終的には地域の活性化につながっていく、それがこれからのＪリーグの方向性なのかもしれない、言うなれば地域の総力戦になっていくのではないかと、では図書館もそこに加わってはどうか、ということを考えます。この辺を議論できればなと思っています。これはおまけなのですが、「課題解決支援はサポーターに響くのではないか」ということで、このコメントは私がずっとお世話になっている愛媛FCのコアなサポーターの方が、図書館海援隊の取り組みについて知った時のコメントです。「図書館とサッカーのコラボよりも、図書館が貧困・困窮支援の取り組んでいることの方が私にとっては驚きでした」ということです。その方は仕事で福祉の仕事をされているのですが、そういうクラブのために動いている方というのは、地域についても生活についても高い問題意識、課題解決意識を持っている方です。だから、サッカーを入りに図書館の課題解決支援の取り組みというのをどんどんアピールできる可能性があるのではないかと思います。

ということで、最初は微妙だなと思った「図書館海援隊サッカー部」というネーミングなのですが、絶妙なネーミングだなと思いました。神代さんありがとうございます。パネルディスカッションの方でまた議論を深めていければと思います。ということでご清聴ありがとうございました。

祖父江「ありがとうございました。続きまして、北九州市役所の佐藤全さまより本フォーラムの協力団体のひとつである九州Ｊリーグホームタウン連携会議の活動報告をしていただきます。それでは佐藤さま、よろしくお願いいたします。」

九州Ｊリーグホームタウン連携会議の活動報告（抄）：佐藤全氏（北九州市役所広報室）

現在北九州市の広報室でフィルムコミッション図書館担当している佐藤全です。それまでは５年ほどスポーツ振興課でギラヴァンツ北九州がＪリーグに上がるころから関わっていました。上がる前２年、上がって３年、そんな縁で来ました。フィルムコミッションは２５年活動していて、「ジンクス」「オリンピックの身代金」など１６１本のドラマ・映画に関わっている。４月に上映した「図書館戦争」は美術館と中央図書館をメインのロケ地にしている。休みの日があるので２週間掛かった。夜中に撮影した。撮影後は展示も行った。１１月はDVD発売もあって同じ展示をしている。映画の小物、衣装など。図書館でギラヴァンツ北九州のコーナーも作っている。

九州Ｊリーグホームタウン連携会議は、Ｊリーグに上がった３年前に鳥栖市から声が掛かり、在籍する６つのクラブで何かできないかということで、考えて、同士対決は行き来しやすいので、盛り上げて客を呼び込もうと自治体担当者が考えて作り上げた。基本的に予算もお互いの旅費くらいしかなく、２ヶ月から３ヶ月に１回持ち

回りで会議する。好い情報は真似る。より好いものにしてやる、ということで都合4年目になった。まだまだ客は増えてないながらも地道に取り組んでいるので、図書館関係者にも協力してもらいたい。立ち上げの時はマスコットも来て、マスコミも来てにぎやかだった。新聞にも載った。Jリーグの試合は土日開催、役所は土日休み。情報を得るには観光情報センターになる。図書館は土日もやっていて役所に近いところに建っていることも多いので、情報発信スペースには有意義、地域のための図書館という側面と、観光、遠方からの人のためへの情報発信だと思っている。私もよくアウェイでは図書館が気になってのぞいてみたりする。それぞれの個性や味わい、その土地の空気が分かる。旅行に行ったら、図書館を見ていただくのもその土地を知る上で好いかもしれない。

【パネルディスカッション（抄）】

コーディネーター

南 博 氏(北九州市立大学准教授／コーディネーター)

パネリスト

川端 暁彦氏（フリージャーナリスト、元サッカー専門新聞エル・ゴラッソ編集長）

竹中 嘉久氏（愛知工業大学准教授、元川崎フロンターレサッカー事業 部長）

堀行 徳 氏（菊陽町教育委員会生涯学習課課長）

天野奈緒也氏（愛媛県立図書館）

（祖父江）「それではパネルディスカッションを始めたいと思います。これよりの進行はコーディネーターであります北九州市立大学の南博先生にお渡しいたします。よろしくお願いいたします。」

（南）「それでは始めます。このパネルディスカッションでは基調報告で天野さんから3点、論点を示していただきました。ひとつはクラブの歴史をアーカイブする、2つ目は地域活性化への貢献、これら2つはこれまでの取り組み、それから今後の課題として、サポーターの課題解決を支援。それに基づいてこれらの中身について深めていくディスカッションにしたいと思います。まず自己紹介をさせていただきます。」

（川端）「フリーランスのジャーナリストです。8月まではサッカー専門新聞のエル・ゴラッソで編集長をしていました。その中で図書館海援隊サッカー部の活動を知りまして、鳥取に変態図書館員がいると聞きまして、ちょっと取材をさせていただきました。それまでは図書館海援隊サッカー部のことは知らなくて、フォローしていたらこういう話をいただきました。」

（竹中）「こんにちわ、2010年までは川崎フロンターレに勤めていました。昨年（総合展フォーラムに）出席していた天野（川崎フロンターレプロモーション部長）の上司で、猛獣でした。私の好きな色は水色で嫌いな色はオレンジです。祖父江さんの新潟には大変大変お世話になりました。ありがとうございました。」

（堀）「ちょっと話しぶりなのですが、現在は熊本県菊陽町の生涯学習課長をしております堀と申します。平成22年4月1日より25年3月31日まで菊陽町図書館の館長をしていました。日本サッカー協会登録選手の一人です。隣の熊本市がホームタウンで菊陽町図書館はホームタウンではありませんが、自宅からうまスタまで2.5kmしかなくて近く図書館からも5~6km。館長としては専門職ではないのでお客様目線でしか見れないが、働きやすい環境作り、意識改革をした。ヴィジョン作りをする中で地域に根差すというJとのコラボの起点があ

りました。特にやったのは、変わる・変えるということです。それは、知の温故知新。相手目線で物事を考えること。ロアッソとの打ち合わせは平成 23 年 3 月 11 日の 15 時に予定していました。行く途中に東日本大震災がおこりました。そういう状況で始まったので運命的なものを感じています。取組の一部分はホール外に掲示しています。取組内容は常設展示、企画展示、交換展示などです。鳥取県立図書館ともやりました。22 年 10 月には図書館海援隊サッカー部に加入しました。今年のイベントで『女性だけのロアッソ観戦講座初心者編』をやりました。」

(天野)「愛媛県立の天野です。ウチは J2 なのでフロンターレとの対戦はないのですが、このカエル（一平君）はフロンターレのマスコットとボクシング対決をしました。」

(南)「ありがとうございました。私は普段は地域社会や地域経済の活性化に向けてどういう都市政策があるべきかというのを研究しています。公職として北九州市スポーツ推進審議会だとか、よその自治体の行政評価、市民参画の評議会に参加しています。その中で当時ニューウェーブ北九州というクラブが JFL に上がり街の活性化に重要な役を果たすのではないかとということで、2008 年から J リーグの研究もしています。新スタジアム建設の検討や観戦者の調査にも関わっていて、北九州市立図書館の展示の手伝いもしています。特色として、客が少ない土地ということがあります。試合日程告知をイラスト入りのポスターで展示しています。イラストはサポーターに描いてもらっていて、今年は菊陽町図書館とも交換展示しました。

では、論点ごとに話を進めます。1 点目はクラブの歴史をアーカイブすることについて。それぞれの立場からの考えを聴かせてください。まずは堀さんからお願いします。」

(堀)「基本的には皆さんが図書館業務としてやっていることをやっているだけです。どこでもやれると思います。チームの発行物、新聞記事を集めてコーナーを作っています。常設コーナーでは（今はロアッソ熊本とありますが、JFL 時代はロッソ熊本）、私物を公的に展示しています。僕のコレクションです。職員作成で監督選手コーチ、試合日程のカレンダーを顔や住んでいる選手がいてスタジアムも近いので、地域資料のひとつとして置いています。特別な部分としては、応援メッセージも集めています。取り組みをするだけならクラブの許可がいらないところでできます。気軽な気持ちで（動機は不純でもいい。）始めて、後は本来業務として続けていくだけだと考えています。」

(南)「ありがとうございます。続いて、クラブにいた立場から竹中さんに、アーカイブについてお願いします。」

(竹中)「フロンターレに 10 年いて辞めて 3 年です。歴史資料、アーカイブは基本的に継続して作っていくものだと思います。クラブの事情からは、担当者が代わったりした時、引継ぎが出来ていないと途切れてしまいます。図書館の担当も人事異動で 2〜3 年に一度代わってしまって、その時に上手く引継ぎができないと断たれてしまいます。クラブ側も図書館側もアーカイブの引き継ぎに関して個人的な力に頼るのではなく組織的に考えなくては行けません。J リーグにも問題があります。40 クラブあって、まともな会社組織として成り立っているのは 10 クラブくらいだと思います。本当はそれを指導しないと行けない。人事異動を含めて情報・アーカイブの継続、サステナビリティはどうやればちゃんと出来るようになるのか。また行政側もちゃんと分かっていると、異動した時に挨拶に来る時間もないので、それをクラブ側も理解しないと行けません。図書館もそれをクラブに説明する必要があります。クラブは経営よりもサッカー好きが多いので、それ以外の部分は知らないことが多い。互いの事情を知ると継続性が生まれると思います。」

(南)「ありがとうございます。では、ジャーナリストの立場から川端さん、お願いします。」

(川端)「書く側の立場からすると、やはり資料が欲しいと思うことはよくあります。クラブに問い合わせると大抵の場合は『あるかもしれませんが分かりません』と返ってくる。担当者が代わって行く中で分からなくなったり、熱意のある職員が片手間でやってたりすると、その人がいなくなるとなくなってしまいます。その役割を図書館が担ってくれると嬉しいです。貧乏なクラブが多いので、人は定着しないし仕事は減らせません。そうするとアーカイブをするのは難しくなります。三国志の蜀にだけ歴史に関する部署が無かったので、記録が残っていません。Jのクラブはそんなところが多いと感じています。そういう時に図書館が地域として担ってくれればありがたい。」

(南)「ありがとうございます。同じくジャーナリストと図書館との関わりということで、ここで神戸市立中央図書館の松永さんにお話をいただきたいと思います。」

(松永)「神戸市立中央図書館の松永です。賀川浩氏、神戸市出身の元産経スポーツ編集部長が所蔵するサッカー関連資料図書約 5000 点を受贈し、特別コレクションとして中央図書館内に開設する予定です。賀川氏はサッカーをされていた選手であり同時にスポーツ記者として、1975 年から 10 年間編集部長をしていました。その時に集めた本を、高齢ということもあって神戸市に寄贈されました。その中にはイギリスで出た古い本もあり、日本サッカー協会の誕生にも言及してます。ご自身のウェブサイトもあり、とても充実しています。サッカーは横浜と神戸のどちらが先かという話ですが、広めたという観点からは神戸だと述べています。初の法人格である神戸フットボールクラブには田辺文庫というのがあり、将来的にはまとめて受贈したいと考えています。連携については東京のサッカーミュージアムやライブラリと、また神戸市立の現館長は 2002 年の W 杯で推進室の主幹として、さらに日本大会の組織委員会にも出向していたので機運があります。来年は W 杯の年でもあり、神戸も J1 復帰できたので、賀川さんの講演会をしたいと考えています。継続性というところでは、かなり大きな荷物を背負いました。これから継続的にサッカーの資料をずっと集めていけるかが課題です。」

(南)「ありがとうございました。川端さん、いかがですか。」

(川端)「僕らにとっては神みたいな存在で。サッカージャーナリストの先駆けで、88 歳の現役の方です。」

(南)「クラブの歴史のアーカイブについて各氏からお話をいただいたが、愛媛県立の天野さんいかがですか？」

(天野)「堀さんが『普段の図書館でやってる仕事の中でどこでもできる』という話があったが、地域の中に目配りをして活動しているところに図書館が気付かないと残らないという側面があります。今回はサッカークラブのことだが、それに限らずに地域で活動しているさまざまな団体にも目配りをして、そういった組織の刊行物もアーカイブしていくことも重要だと思います。逆に、図書館がそういうことをしているということを、組織・団体にもっと PR していく必要があると思います。もう一方、竹中さんからあった『図書館側の組織的な継続』ですが、これを一過性のブームで終わらせるのではなく、続いて行くようにしていかなければなりません。また日本サッカー協会にはサッカーミュージアムの中にレファレンスルームがあるが、神戸市立のように公共図書館の中でサッカー資料が体系的に収集されることはなかったもので、これはひとつのサッカー部の取り組みの成果と言えるのではないかと思います。」

(南)「ありがとうございました。では次の論点に進めます。地域活性化への貢献ということで、堀さんからおねがいします。」

(堀)「地域の貢献で、何が得られたのかということですが、一言で言うなら変化が起きたということです。みんなが図書館のイメージを固定化していました。でも私は、図書館は基本的に枠が無いのではないかと思います。」

ます。だからこそコラボが生まれたと思っているのです。図書館がプロスポーツと何かをやる面白い発想、アイデアとしてお客さんが見てくれました。最初は面白がって見ていたのかもしれないが、結果的にいい化学反応が起きたと思います。それを図書館サイドから捉えると、常連にだけ情報発信していただけだったのが、新規の顧客を開拓したということになると思います。地域に目を向けなくてはいけなくなってきたということです。実際にJとのコラボによってそういう意識が図書館職員にも芽生えてきました。自分も何かアイデアを出したい、採用してくれるかもといういい化学変化が起きて、職員も地域を意識するようになりました。するとお客さんの、面白いねという部分が『図書館は』面白いねに変化していきます。もしかしたら次は何かやるのではという期待感が生まれて来ます。これらの起爆剤になったのがJとのコラボだと思います。100年後にも今の図書館が必要だと思うが、そのための土台作りを今やっている感じです。アメリカで本の無い図書館が OPEN したが、もしかしたら 20 年後に今の図書館が無くなるかもしれない。その時に危機感を感じても遅い。図書館は必要だと思うための一石です。」

(南)「ありがとうございます。クラブの立場から竹中さん、地域の団体と連携しての地域活性化についてお話しください。」

(竹中)「私がいた川崎市は、「プロスポーツが根付かない街」、大洋、ロッテ、ヴェルディなど、川崎も出ていくのではないかといわれます。人口は 130 万人。年間移動人口が 10 万人。ファンクラブも毎年 1 割が動きます。根付かないのは、クラブではなく行政に問題があると提起しています。クラブに行政担当の窓口を設けるのは大事、これは、上層部だけでなく事務レベルで専任が必要だと考えています。私はロビー活動でそれを提言してきました。5 年活動するとその時の相手が昇進していきます。クラブがロビー活動をする機能を持ち、クラブ側も、行政の施策ニーズを把握することが必要です。お願いするだけでなく、返していかないといけないのです。ギブアンドテイクが成立するかどうかです。お互いのいい意味での緊張関係も作らなければならないし、川崎フロンターレ時代はその辺をポイントにしていました。」

(南)「それでは、どちらの立場でもない川端さん、地域におけるクラブの存在意義についてお願いします。」

(川端)「存在意義だと大きな話だが、多彩だと思います。たとえばガイナレ鳥取があることによって、今まで鳥取に行かなかった人が万単位で行くようになる。人を呼べるというのが行政にも分かりやすい効用です。ファジアーノ岡山のサポーターが言っていたのは、今までクラブが無い時代は岡山を自分のバックボーンに感じられなかったが、できてからクラブやスタジアムに行く中で地域の人たちとの連帯感が感じられるようになった。喜怒哀楽を共有できるということは、特に地方都市では見えない部分で大事な役を担っているのではないのでしょうか。」

(南)「天野さん、今までの話を聞いてどうでしょうか。」

(天野)「堀さんの連携で化学変化というのはそう思います。クラブはベンチャー企業のようにいろんな取り組みをしています。昨年(図書館総合展に)登壇された(フロンターレ)天野さんの著書を読むと、図書館でも役立つアイデアが山のようにあるんです。連携しないと見えてこないものがあると思います。ビジネス支援でも医療健康情報でも他と連携することによって初めて気づくことが必ずあります。竹中さんの緊張関係を保つということについては、お願いするのではなく一緒にやろうという協力関係を築くことが非常に大事だと思います。川端さんの喜怒哀楽の共有については、個人的に愛媛出身ではないのですが、クラブと連携することによって愛媛に対する愛着を持つことができました。」

(南)「続いて 3 つ目の論点。今後の課題、サポーターの課題解決の支援について。川端さんからおねがいします。」

(川端)「2 年半前の東日本大震災で、サポーターの力を実感しました。(選手は) ハンコなしで動けます。団体行動に慣れている分、どこよりも早く動き出すことができました。それに後から J クラブや日本サッカー協会が乗かって大きなムーブメントになり、その時、彼らの力を感じました。支援物資を横浜のマリノスタウンに集めた時、中村俊輔が突然現れ、支援物資提供してくれて、さらに輪が広がって行った。サポーターの力を感じました。組織じゃない組織を地域の中で利用できればいいのかもしれないと思います。」

(南)「続いて竹中さんはどうですか。」

(竹中)「川崎フロンターレの中では、当初サポーターともめました。サポーターは客なので、パートナーとして話し合いをするのに苦労しました。図書館でもサポーターズミーティングをやろうとすると、各々仕事があるので昼間には来られない。やるとしたら夜の 8 時以降になります。相手の事情を図書館側も理解しないといけないということです。もうひとつ、フロンターレには非公式のカメラマンや、歴代グッズコレクターがいます。陰で支えてくれる存在に図書館側で接触してもらってアーカイブしてもらいたいです。また、行政が事業を継続していく手法として予算化させることです。そのためにフロンターレはロビー活動をしました。一度通ると予算は継続される可能性が高いと思っています。さらに、行政内のコンセンサス(合意)を取るのが大変です。これもロビー活動で熱く語って努力しました。新しい無形文化財を自分たちで育てているという考え方、これから地域の宝になるものを図書館が記録していくということだと理解していただきたいです。」

(南)「私はふだん行政評価で事業仕分けやコーディネーターをしているので、予算は継続しないと思っていますが、外部評価や庁内での行政評価の場で自信を持って予算が必要だと説明してもらいたいですね。」

(竹中)「その時には、傍聴席にもフロンターレのサポーターを呼んで圧力掛けます。」

(南)「続いて、堀さんはいかがですか？」

(堀)「サポーターの課題解決支援として菊陽町図書館ができることとして、相手目線でサポーターを見ているかというところで考えました。すぐ浮かぶのは自分の応援するチームが強くなって欲しいということ、サポーターの仲間を増やしたい、自分の応援するチームを地域の人に知ってもらいたいという 3 つです。チームを強くするのは図書館の仕事ではないので、図書館は残り 2 つの部分ならできるのではないかと思います。そのために、今やってることを面的かつ時間的にも継続して広めていくことです。県内で本格的にやってるのはうちだけなので、仲間を増やしてネットワークを広げていきたいと考えています。そして、新しいことをやるということはサポーター支援になるかもしれない。菊陽町図書館としては、後ほど最後にお話ししたいと思います。」

(南)「天野さん、いかがですか。」

(天野)「愛媛県立図書館には愛媛プロスポーツアーカイブスというコーナーがあります。その立ち上げでサポーターのグループにコンタクトを取りました。コンセプトを話して、グッズを持っている方を見つけて、協力を得て、それを託してもらった。そういう方が地域にいらっしゃるの、繋がると結構理解してもらえるといます。地域に目を向けて人材を探し出すのは大事です。サポーターのミーティングを図書館に呼び込んだり、こちらから潜り込んでみるのも有効です。そこではチームを強くするための話し合いをしているが、一番はお客さんを増やして支える人を増やすことしか手はないということで、チラシ配りやバスツアーなどを自主的にやっています。飛び込んでみることで、取り組みや必要としているものを聞くことが手がかりになります。市民講座に出

るような感覚でいいと思います。大震災の時も、館内でサポーターグループの復興取り組みを紹介したら、スポーツと縁がなさそうな老人が感心していました。やる意義はあると思います。」

(南)「基調報告の3つの論点について議論をしてきました。まとめに入ります。まずは堀さん、今後の連携に向けた展望ついてお願いします。」

(堀)「うちはホームタウンではないので、熊本市のスタジアムに出向く活動はできません。地域のためにやることは2つです。それは、図書館色をより強めることと、そうでない部分の色も強めることです。前者は図書館の仕事の中で広げて深めていくということで、後者は観光パンフを配ったり観戦講座をやったり、図書館とは関係ない部分も広げていくということです。メッセージ性を強くすること、仕事に魂を込めることが大事だと思っています。心がこもっていない仕事は誰も見てくれません。小さくても下手でも、心のこもった仕事は訴えるものが強いと思っています。最終的にはやれることから、そして続けていくことです。誰でもチャレンジと職場で言っています。」

(南)「それでは同じ図書館の立場から天野さんから、今後の連携についてお願いします。」

(天野)「図書館というよりサッカー部の立場からお話します。クラブの歴史のアーカイブを図書館が支援することや、サポーターの課題解決支援について、結局地域や住民が抱えている問題に対して図書館が情報提供をして解決の手伝いをするということは、図書館海援隊の精神そのものです。(2部の)生活困窮者支援の図は、転用してサポーターに何ができるかとか地域ごとのクラブの課題の図にもできます。図書館海援隊サッカー部というのは冗談めかした名前だが、われわれの根っこの精神は、図書館海援隊そのものです。今はサッカーでのアプローチだが、医療健康情報支援やビジネス支援の担当になっても、精神やノウハウが役に立つと思います。組織としての継続も大事だが、携わった図書館職員の魂も持ち続けて積極的に取り組んでいけると 생각합니다。」

(南)「竹中さんの方からお話をいただきたいと思います。」

(竹中)「個人的見解ですが、これからの図書館はもっと大衆化・ファミリー化を含めて、マーケティングニーズを考えるべきです。それは、知のコンビニ化という考え方です。年間4億人が図書館に来ています。国民が年間3回は来ている計算です。これをもっと上げるには、ツールとしてJリーグを使えばいいし、(知識の象徴としての図書館もあるが)、大衆化を含めて、もっと客のニーズを掘り起こした方がいいと思います。日本図書館協会の略称JLAは、Jリーグ(J League)と共通しているとか、もっと柔軟に考えた方がいいと思います。多少のノリは必要です。あとは、これから育てる無形文化財としてのアーカイブの役割をしていると思って欲しい。Jリーグは100年構想を掲げています。市長には、川崎フロンターレは200年か300年はいるよと言っています。そのくらいのスタンスでやってもらえるとありがたいです。」

(南)「川端さん、いかがですか。」

(川端)「私も家のそばにある図書館でパソコンを開いて原稿を書いています。静かで居心地がいいが席の争奪戦になっている。ライブラリとしての機能は、将来的に紙の本が消えていく流れになった時、余ったスペースは椅子を増やして欲しいと思っています。図書館の大衆化という意味では、新しい時代の図書館として、Jリーグ各クラブは結構力になれると思います。財政的に苦しく全体的にディフェンシブ(保守的)になっているので、Jリーグ側からのオファーは難しい状況です。竹中さんのような姿勢の人もなかなかいないので、図書館から積極的にアプローチして繋がってもらえると、Jクラブ側でも図書館以外とも繋がれるんじゃないかと意識が変わっていくかもしれないと感じています。」

(南)「ありがとうございます。各自の立場からお話をいただきましたが、議論をアイディアに活かしてもらえればと思います。ここで神代隊長からのコメントをお願いします。」

神代「改めて感じたのは、竹中さんのロビー活動についてです。図書館海援隊を始めた理由は図書館に対するアドボカシー（支持）を広めるためです。図書館は本をタダで借りられるだけでなく、地域活性化や課題解決に役立つ市民には欠かせないものだということを、市民の側から予算を付けてもらうとか職員を増やすということを言うってもらうために、図書館の側から働きかけないといけないと思っています。海援隊の根底にある問題意識はJリーグの100年構想と非常に一致するものです。医療健康情報や就労支援、スポーツとの連携など、一見図書館とあまり関係なさそうな分野ですが、実は繋がっているということです。（昨年総合展でフロンターレ川崎プロモ部長の）天野春果さんが言っていた『図書館とJリーグクラブは実は似ている』という発言は、図書館関係者にも心にとめて行動していただきたい。」

(南)「ありがとうございました。本日、Jリーグ事務局の方がいらっしゃいます。Jリーグの中におられる方の個人的な感想ということで、青山さまにコメントをいただきます。」

(青山)「青山です。図書館の中でJリーグの活動を紹介していただいてありがたいと思っています。図書館の抱えている課題は、Jリーグが持っている悩みや考えと共通部分が多いと感じています。（図書館の）活動が知られていないと言っていたが、Jリーグクラブもただサッカーをしているだけとされています。私が担当しているホームタウン活動分野はどうしても出て行きにくい部分なので、図書館の力を借りることでより地域の方に知っていただく機会が増えると思います。Jクラブも地域の課題解決に役立っていかないとと思っています。連携が重要になってくると思うのでよろしくお願いします。」

(南)「皆さま本日は誠にありがとうございました。」

(祖父江)「それではこれもちまして、第3部の図書館海援隊サッカー部の活動を終了します。長時間ご清聴ありがとうございました。」

<写真で綴る第三分科会>



天野奈緒也氏の基調報告



佐藤全氏の活動報告



パネルディスカッションの様子



会場から発言する Jリーグのホームタウン担当青山優香氏



フォーラム終了後のサッカー部の記念写真



全体交流会にはおよそ 50 名の皆さんが参加

『図書館海援隊フォーラム 2013』 実行委員体制

(順不同・敬称略)

実行委員長 永利 和則 (小郡市立図書館)
事務局長 小林 隆志 (鳥取県立図書館)
会 計 西 香奈子 (小郡市立図書館)
顧 問 神代 浩 (元文部科学省生涯学習政策局社会教育課長現文部科学省初等中等教育局国際教育課長)
齋藤 明彦 (元鳥取県立図書館長、鳥取県地域振興部理事監)

第一部責任者 田村調子 (NPO法人キャンサーリボンス)

第二部責任者 小林隆志 (鳥取県立図書館)

第三部責任者 天野奈緒也 (愛媛県立図書館)

<事務局員・当日スタッフ>

松井恵美子 (福岡県立図書館)	友池 之浩 (福岡県立図書館)
那須 健右 (福岡県立図書館)	小久井明京美 (福岡市総合図書館)
繁村 千鶴 (福岡市立早良図書館)	田村幸光 (太宰府市民図書館)
今村 恵子 (太宰府市民図書館)	宮田真珠子 (大宰府市民図書館)
田中のぞみ (小郡市立図書館)	伊東 達也 (春日市民図書館)
楠田 裕子 (春日市民図書館)	横尾三津子 (佐賀県立図書館)
藤田 博文 (鳥栖市立図書館)	末次健太郎 (伊万里市民図書館)
縄田 早苗 (大分県教育委員会)	下田富美子 (長崎市立図書館)
相良 裕 (諫早市立諫早図書館)	山田 美幸 (熊本熊本学園大学)
松本 和代 (菊陽町図書館)	河瀬 裕子 (熊本市立くまもと森都心プラザ図書館)
清家 智子 (宮崎県教育委員会)	下吹越かおる (指宿市立図書館)
呉屋美奈子 (恩納村教育委員会)	祖父江陽子 (新潟市立中央図書館)
高井 陽 (大田区立大森南図書館)	松本 哲郎 (市原市立図書館)
舟田 彰 (川崎市教育委員会)	北澤理絵子 (塩尻市立図書館)
松永 憲明 (神戸市立中央図書館)	三田 祐子 (鳥取県立図書館)
高橋真太郎 (鳥取県立図書館)	畠中由希子 (広島市立中央図書館)
土井しのぶ (広島市立中央図書館)	

＜会計の処理の基本的な考え方＞

協賛金については、第 1 部～第 3 部でそれぞれ 3 等分しそれぞれが会計処理を行う。第 1 部の会計処理は、NPO 法人キャンサーリボンズが行い、実行委員長に報告する。第 2 部と第 3 部については、事務局長が最終確認して実行委員長に報告する。各部の会計処理で、残金が出た場合は、第一部については、キャンサーリボンズに、第 2・3 部についてはビジネス支援図書館協議会に返金することとする。

図書館海援隊フォーラム 2013 第 2・3 部決算書

(収入)

(円)

科 目	決算額	備 考
共催者拠出金	200,000	ビジネス支援図書館推進協議会より
協賛金	180,000	合計 27 万円の 2/3 相当額 (紀伊國屋 10 万円、日本統計センター6 万円、日本ファイリング 5 万円、TRC2 万円、キハラ 2 万円、富士通 2 万円)
合 計	380,000	

(支出)

科 目		決算額	備 考
事業費	パネリスト謝金	80,000	A 50,000 円、 B 30,000 千円
	発表者旅費	143,040	C 50,000 円、 D 36,880 円、 E 1,360 円、 F 34,800 円
	飲食費	0	
	印刷費	6,420	コピー代 220 円、用紙代 4,152 円、ロール紙代 2,048 円
	消耗品費	2,150	講演用水・紙コップ 2,152 円
合 計		231,610	

収入 380,000 円－支出 231,610 円＝148,390 円、

※148,390 円から、振込手数料を差し引きした金額をビジネス支援図書館協議会へ返金することとする。